

ジャック＝ダルクローズの教育観の発展に関する研究 —ルソー研究所、クラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーとの関わりを中心に—

細川 匡美

1. 研究の課題と背景

ジャック＝ダルクローズ(Jaques-Dalcroze, Émile 1865-1950、以下、J＝ダルクローズと表記)は、スイスの作曲家で音楽教育法リトミックの創始者である。当時の音楽教育は専門家のための技術教育を重視したものであった。しかし、J＝ダルクローズは音楽を通して人間性を豊かにする教育を目指した。その教育法を確立する過程で、彼は当時の最新の生理学や心理学に関心を持ち、出会った多くの識者たちから影響を受け、リトミックが貢献するであろう教育的価値について証明しようとした。

リトミックが今日、我が国の幼児教育や初等教育において幅広く応用、実践されている要因のひとつは、音楽性を向上させるとともに子どもの個々の発達や個性に即し、子どもの集中力や思考力、社会性などを引き出す教育的有用性にある。従って、リトミック研究において、その重要性を歴史的研究の観点からJ＝ダルクローズの教育観を再検討することには意義があると思われる。J＝ダルクローズの教育観の形成に関わりをもつ同時代に活躍した人物として、教育改革を推進させた次の心理学者や教育家たちが挙げられる。ジュネーヴでは心理学者のクラパレード(Claparède, Edouard 1873-1940)、イタリアでは、障がい児の治療教育で得た感覚教育法の成果を、健常児にも適用させた教育者のモンテッソーリ(Montessori, Maria 1870-1952)、ベルギーの精神科医で教育家のドクロリー(Decroly, Ovide 1871-1932)などである。

本研究の課題はJ＝ダルクローズと同時代に活躍し、リトミックの受容に関わったこれらの教育者たちとの関係を明らかにした上で、彼らから受けた学びによりJ＝ダルクローズの教育観がどのように発展したかを検討し、それが当時の教育の中でどのように位置づけられるかを考察することである。

2. 本論の概要

第1章 ルソー研究所におけるジャック＝ダルクローズの教育法

第1章においては、クラパレードがジュネーヴに創立した「ルソー研究所」とリトミックとの関係について検討し、リトミックの受容が果たした役割について考察した。ルソー研究所は子どもの教育改革のためのラボラトリー、教員養成などを目的とした先駆的教育機関であった。ルソー研究所とJ＝ダルクローズ研究所は、互いの研究所で教育学とリトミックの授業を行っていたことが明らかになった。これはJ＝ダルクローズがリトミックに教育学の知識が不可欠であると考えていたことを示している。一方、ルソー研究所はリトミックを「音楽を活用した身体運動」として、子どもの発達や気質に応じた人間性への教育的成果をもたらす教育法であると評価していた。

第2章 クラパレードからジャック＝ダルクローズへなされた教育に関する示唆について

J＝ダルクローズは音楽家のための音楽教育から、子どもの内省する能力を発揮させ、調和のとれた人間形成を目指す音楽教育へとその教育観を発展させている。第2章では、J＝ダルクローズの教育観の構築への背景のひとつに、クラパレードから与えられた子どもの視点に立った教育学的示唆があったことについて検討した。本章では両者が交わした書簡をもとに、J＝ダルクローズの著書『呼吸と筋肉の神経支配・解剖図(1906)』や『ジャック＝ダルクローズのメソッド(1906)』等の内容から、クラ

パレードの助言や協力がJ=ダルクローズの指導法や教育観に影響を与えたことを明らかにした。

第3章 モンテッソーリとJ=ダルクローズの身体運動を活用した音楽教育

第3章では、モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の中でリトミックが実践されていたことについて明らかにした。モンテッソーリは「運動の組織化による人格形成(1932)」の中で、身体運動が人格形成に及ぼす影響やリトミックについて言及しており、身体運動が最終的には「精神と運動の根本的な統一」に達するという見解を示している。つまり、モンテッソーリは身体運動により子どもの自己コントロール機能が促されると捉えていた。J=ダルクローズもモンテッソーリが提唱する乳幼児教育の効果について評価していた。

第4章 ベルギーにおけるリトミックの受容と展開

ベルギーを代表する精神科医で教育者のドクロリーは、障がい児教育施設での成果を基に健常児のための学校を設立した人物である。そのドクロリー学校でもリトミックが行われていた。ドクロリーは運動や遊びの欲求を助けるために音楽やリズムを使ったリトミックを導入し、障がい児への効果はそのまま健常児の教育法に適用されたと考えられる。ベルギーでは障がい児教育や幼児教育、初等教育へのリトミックの有用性が認められていたばかりでなく、演劇やダンスなど幅広い分野においてリトミックが展開されていた。

第5章 J=ダルクローズの教育理念に関する研究 —新教育連盟における活動を通して—

クラパレードやモンテッソーリ、ドクロリーは新教育連盟の組織の中心人物であり、それぞれ異なる教育観をもちながらも抑圧的な既存の教育に対して子ども個人の成長を中心に教育を考えていく新教育運動の同朋であった。J=ダルクローズも音楽教育家として新教育連盟の会議に参加をしている。新教育の動向の中で、リトミックは音楽技術の向上ではなく、自由に表現することで人間としての解放を目指す革新的な音楽教育として、新しい心理学的視座による方法論をもつ、例えば子どもの身体的・精神的における有益な働きについて、また内省する創造力等の能力を発達させ人格の成長に寄与するという新しい教育観を持った音楽教育法として重要な役割を果たしていた。

終章 結論

J=ダルクローズは専門的に音楽を学ぶ学生のための音楽教育から、身体運動を伴ったリトミックによって精神と肉体のバランス・調和を目指すようになった。その教育観の発展の背景には、多くの研究者や教育者たちからの影響があったことが明らかになった。その影響により、彼は子どもの視点に立った音楽教育を目指すようになったのである。新教育連盟の会議におけるJ=ダルクローズの積極的なアプローチも、当時の教育心理学や障がい児研究の依拠によるものと考えられる。J=ダルクローズは当初、実践によるリトミックの指導法に対して、科学的な根拠を求めてクラパレードの心理学的なアプローチによる教育に学び、リトミックを教育的効果のある音楽教育へと体系化させた。彼は子どもの集中力や判断力などを喚起するために、筋肉組織と神経中枢が及ぼす影響について確証を得ることとなった。また、クラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーの創立した教育施設でリトミックが実施されていたことが本研究により明らかになった。このことは、リトミックが身体運動と音楽を融合させ、子どもの集中力や社会性などを引き出す一般教育として、また障がい児教育にも有効な教育法として位置付けられていたことを示している。

引用文献

- J-Dalcroze, *La correspondance* (Lettres à Claparède), 1906
- J-Dalcroze, *La Respiration l'Innervation Musculaire Planches Anatomiques* Sandoz, Jobin & Cie, Editeurs. 1906
- Montessori, “Der Aufbau der Person durch die Organisation der Bewegungen” , Böhm, *Maria Montessori Texte und Gegenwartsdiskussion*, 1932. pp.77-80 他